

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 26 日現在

機関番号：12401

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23320028

研究課題名(和文) ヴァールブルク美学・文化科学の可能性 批判的継承から新たな創造へ

研究課題名(英文) Possibility of Aesthetics and Cultural Sciences in Warburg

研究代表者

伊藤 博明 (ITO, Hiroaki)

埼玉大学・人文社会科学部研究科・教授

研究者番号：70184679

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,600,000円

研究成果の概要(和文)：ヴァールブルクが晩年に取り組んだ、未完の学問的プロジェクトである『ムネモシュネ・アトラス』に所蔵された全パネルについて共同して詳しく読み解き、その成果は図書として刊行するとともに、2回のシンポジウム「アビ・ヴァールブルクの宇宙」と「ムネモシュネ・アトラス展」において公表した。ヴァールブルクの研究を批判的に受け継ぎ、文化系統学、イメージ人類学、神話の構造分析、世俗世界のイコノロジーなどについて方法論的考察を深め、その成果は7名の外国人研究者を含んだ国際シンポジウム「思考手段と文化形象としてのイメージ アビ・ヴァールブルクから技術的イメージ・図像行為まで」において発表した。

研究成果の概要(英文)： We researched all panels of “Munemyne Atlas”, the unfinished academic project, that Aby Warburg tried to accomplish late his life. Its result was published as a rather large book and was publicly revealed through two symposiums: “The World of Aby Warburg” and “Exhibition of Mnemosyne Atlas”.

We, succeeding to Warburg's studies critically, inquired into the methodology on Cultural Systematic, Image Anthropology, Structural Analysis of Myth, Iconology of Vulgar World, etc. Their results were given out in the international symposium: “Images as Methods of Thinking and Cultural Figures: From Aby Warburg to Technological Images and Image-Acts.”

研究分野：芸術論

キーワード：アビ・ヴァールブルク ムネモシュネ・アトラス イメージ人類学

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 1929年にヴァールブルクが死去したのち、1932年に『著作集』全2巻が刊行されたものの、戦時下にあつて多くの読者を得ることはなかった。そして、ヴァールブルクの名声はむしろ、1933年にロンドンに逃れ、やがてロンドン大学の附属機関となったウォーバーグ研究所の、第2次世界大戦後の華々しい活動に負うところが大きかった。状況が変化したのは、1992年のヴュトケ編纂による『ヴァールブルク選文集』の刊行からであり、1998年からは上記『著作集』を第1巻として、新たな『ヴァールブルク全集』(プレーデカンフ他編集)の刊行が始まった。2004年からはイタリア語版『全集』も刊行され始め、それと相前後して、すでに存在していたイタリア語訳選集に加えて、フランス語訳選集、英訳選集、スペイン語訳選集が続いて刊行された。

(2) わが国では、本申請の研究代表者である伊藤博明と、研究分担者である加藤哲弘が監訳者となり、2003年より「ヴァールブルク著作集」全7巻(ありな書房刊)を、ウォーバーグ研究所の支援のもとに刊行し2006年に完結した。この著作集によって、公開されているテキストのほぼすべては邦訳で読むことが可能となった。他方、ヴァールブルクの業績に関わる研究も、1990年代より飛躍的に増加しているが、わが国における本格的な研究は、研究分担者である田中純による『アビ・ヴァールブルク記憶の迷宮』(2001年、サントリー学芸賞受賞)だけである。

(3) ヴァールブルクの畢竟の学問的プロジェクトと言ふべき『ムネモシュネ・アトラス』は、現存する最終ヴァージョンでは計63枚のパネルから成り、その各々には一つのタイトルのもとに、3枚から20枚を超えるイメージが含まれている。ヴァールブルクはパネルに対応するテキストを残さず亡くなったが、図像パネル集自体もようやく、2000年に上記『全集』の一冊として刊行され、その後、イタリア語版とスペイン語版も刊行されている。他には、各パネルに関連する、ヴァールブルクおよび研究者のテキストを付加した、「ダイダロス」版(1998年)が存在する。

(4) 『ムネモシュネ・アトラス』は、その内容的な重要性にも関わらず、ゴンブリッチによる簡明な紹介(1970年)以降、すべてのパネルにわたる解読の試みとしては、パウエルレ(1988年)とヒュイステデ(1992年)に研究が挙げられるだけで、しかもそれらは決して十全なものではない。本申請の研究代表者・分担者は、平成19年より『ムネモシュネ・アトラス』全体の徹底的な解読をめざして、定期的に十数回

に及び研究会を重ねてきた。その過程の中で、ヴァールブルクが提出した問題群を分析しつつも、ヴァールブルクの思想圏を超えて、われわれが独自に、新たな学問的な方向性を見だし、新たな成果を産みだす可能性が存在することを理解するに至った。

## 2. 研究の目的

アビ・ヴァールブルクが美学と文化科学、そして美術史と文化史において果たした学問的な功績については、近年、世界的に再評価の機運が高まっている。本研究の目的は、既成の学問領域に収まらない問題設定と方法論によって思索を重ねたヴァールブルクが、晩年に自らの学問的探究の総決算として取り組んだ、イメージのモニタージュと言ふべき『ムネモシュネ・アトラス』の全パネルを読解し、そこで析出された問題群を批判的に継承しながら、新たな視点のもとに独自の研究成果を産みだすことである。換言するならば、ヴァールブルクの遺産を摂取・咀嚼した上で、彼を「超え」、それによってヴァールブルクに「未来の生」を賦与することである。

## 3. 研究の方法

(1) 『ムネモシュネ・アトラス』の総合的理解に向けて、各自が研究目的に沿った研究を行い、定期的な研究会を開催して、研究成果を共有する。全体的な成果は、平成24年度に『ムネモシュネ・アトラス』の解説書として刊行する。

(2) 『ムネモシュネ・アトラス』の問題群の発展的な研究に向けて、各自が研究目的に沿った研究を行い、定期的な研究会を開催して、研究成果を共有する。その成果は、国際美学学会・国際エンブレム学会など、内外の研究集会において発表する。

(3) 上記の2つの研究に関わって、平成26年度に海外の研究協力者を招いて国際シンポジウム「ヴァールブルク美学・文化科学の可能性」を開催し、本研究の成果を世界的に発信するとともに、研究交流を行う。その結果は、研究報告書(書籍)を通じて一般に公開される。

## 4. 研究成果

(1) 『ムネモシュネ・アトラス』の総合的な理解

古典古代の浮彫りや陶器画に見られる物語表現について、ヴァールブルクも参照した考古学者ローベルトによる調査研究を検討して論文として発表するとともに、『ムネモシュネ・アトラス』にも写真が掲載されている、スウェーデンの画家ラーションによる国立美術館壁画における北欧神話の表現について現地調査を行った。また、晩年のヴァールブルクが取り組んでいた「美学」

ないしは「感性論」についての研究は基礎的な調査を終えた。

『ムネモシュネ・アトラス』における「パトスフォルメル」の諸相を「ニンフ」「河神」「頭を手でつかむ身振り」「狂乱の母」「女性の略奪」といった主題別に整理して、それぞれの指標となる要素を個々のパネルが含むか否かという規準によって分類を試みた。その際、統計学的なクラスター分析の手法を用いることにより、『ムネモシュネ・アトラス』をいくつかのクラスターに分割し、その関係性を考察することを通じて、『ムネモシュネ・アトラス』全体の重層的な構造分析を達成した。この過程で「女性の略奪」という「パトスフォルメル」の主題の背景にある政治的・社会的コンテクストがジョルジュ・デュメジルの比較神話学の知見に関連することを発見し、『ムネモシュネ・アトラス』と神話学とを融合したイコノロジー的な文化構造論への展望を得た。

『ムネモシュネ・アトラス』における占星術的なモチーフについて、フランツ・ボル追悼講演や、ハンプルクのプラネタリウスのためにヴァールブルクが作成した図像アトラスとの照合や比較を行いつつ、また晩年における「ペルセウス」のイメージが持つ思想的な課題について明らかにした。

『ムネモシュネ・アトラス』邦語版作成のために、研究代表者と研究分担者が共同の作業を行い、2012年にありな書房から刊行した。

『ムネモシュネ・アトラス』の写真パネル再現展示に際し、パネル相互の空間的配置を通して、ヴァールブルクが構想して図像ネットワークの多次元的な構造を明らかにした。同展において『ムネモシュネ・アトラス』に準じた方法で新作パネルを作成する過程で、「ニンフ」の情念定型と対をなす「アトラス」の定型表現を「プルチネッタ」や「せむし」のイメージと関連づけ、神話的想像力の新たな系譜を浮かび上がらせた。

『ムネモシュネ・アトラス』の全パネルとその成立過程を見直す作業の中で、とくに、「動的生」を伝えるメディアとしてのタピスリーに対するヴァールブルクのとらえ方を解明するとともに、勝者と敗者の対比を強調する古代からの情念定型の残存を、現代における写真作品の中に確認した。

『ムネモシュネ・アトラス』に含まれる多量の占星術関連のパネルの詳しい分析を行い、とりわけペルセウスのイメージの変遷に焦点を当てながら、ヴァールブルクにおける「アポロンの世界とディオニュシオスの世界」、「アテネとアレクサンドリア」という対

立する概念の中での思想空間の意義を提示した。

(2)『ムネモシュネ・アトラス』の問題群の発展的な研究

邦語版『ムネモシュネ・アトラス』という研究成果を展開させるために、連携研究者3名の協力を得て、二度にわたるシンポジウム「アビ・ヴァールブルクの宇宙 『ムネモシュネ・アトラス』をめぐる」、および「ヴァールブルク美学・文化科学の可能性」を開催して大きな成果を得た。

ヴァールブルクが折に触れて書き遺したエッセイや講演原稿などに見られる文化政治学的な発言の中から、イメージが視覚メディアとして果たす社会的機能をめぐるテキストに注目して、その一部の日本語化に着手するとともに、ルーモールを中心に、1世紀後のヴァールブルクと同様に、18世紀末から19世紀初頭のイタリアで活動したドイツ人芸術家や美術史家たちの活動様態について考察した。

『ムネモシュネ・アトラス』の準じた図版によるパネル構成を通じて発見された「ニンフ」の情念定型と結びつく鳥=女(セイレーン)のイメージ系列と「アトラス」の情念定型と結びつく「せむし」のイメージ系列の関係性を、19世紀から20世紀初頭にかけてドイツ語圏における「陶酔」という主題をめぐるさまざまな文化的動向を背景に、「アビ・ヴァールブルクにおける陶酔とメランコリーの認識法」と題する論文にまとめた。さらに「せむし」の系列と深く関わるジルベール・クラヴェルの建築作品や小説草稿に見いだされる神話的想像力について、国際美学会(クラクフ、2013年7月)や「ヨーロッパ・モダニズムおよびアヴァンギャルド(1900-1950)における時間と時間性」会議において口頭発表を行った。

ヴァールブルクの学術的な関心のひとつであったイメージとテキスト(文学・思想)との連関を中心に考察し、その成果は「インプレーサからエンブレムへーベイコン『大革新』のフロンティスピースをめぐって」として発表し、松田美作子編『イメージの劇場』に収められた。また、イエズス会初期エンブレム・ブックに関する発表“Missionaries and Images: On an Evangelical Illustrated Book Published at Rome in 1573”を行った。

ヴァールブルクは、歴史家を過去からの波動を感受して記録する地震計に譬え、そのような地震計の波形図を思わせる小さく奇妙な抽象的ダイアグラムを、彼は研究ノートにいくつも書き残している。この主題に関する研究成果として、「ダイアグラムと発見の論理 アーカイヴに眠る 思考のイメージ」

と題する講演を2014年10月に、京都市立芸術大学芸術資源研究センターにおいて行った。

「イメージ学/イメージ科学」とヴァールブルクの関係について、2015年3月に立命館大学アトリサーチセンターで開催されたシンポジウム「ノマドとしてのイメージ ハンス・ベルティン『イメージ人類学』再考」において提題を行い、美術史研究の枠組みを超えた彼の「人類学的」なイメージ理解について論議した。

ヴァールブルクが関心を抱き続けていた、イメージの伝搬の問題について、15世紀後半にローマで刊行された図解福音書とその展開について考察し、その成果は2014年8月にキールで開催された第11回国際エンブレム学会において発表した。

本研究課題についての総括として、2016年4月に、ホルスト・ブレードカンプを始めとする7名の外国人研究者を交えて、国際シンポジウム「思考手段と文化継承としてのイメージ アビ・ヴァールブルクからの技術的イメージ・図像行為まで」を開催して、本研究における成果の批判的な検討を行った。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計11件)

加藤 哲弘、ヴァールブルクとイメージの人類学、立命館言語文化研究、査読無、Vol.27、No.4、2016、21-35

田中 純、総合的身体論へ：神経系人文学の制度的条件と未来、思想、査読無、2016、2-15

加藤 哲弘、イメージ人類学——その可能性と限界——、人文論究、査読無、Vol.65、No.1、2015、119-139

伊藤 博明、キルヒャーとオペリスク、19世紀研究、査読無、Vol.9、2015、39-72

伊藤 博明、シビュラの行方——アウグスティヌスからパラッツォ・オルシーニまで——、西洋中世研究、査読有、Vol.6、2014、88-112

加藤 哲弘、《硫黄島の星条旗》——勝者と敗者の情念定型——、美学論究、査読無、Vol.28、2013、pp.1-19

加藤 哲弘、ルーモールのイタリア旅行(1805-06年)——食文化哲学と美術史研究のあいだで——、人文論究、査読無、Vol.63、No.1、2013年、77-99

加藤 哲弘、ルーモールと、その再評価をめぐって、査読無、Vol.16、2012、pp.223-234

加藤 哲弘、カルル・ローベルトと考古学的解釈学、人文論究、査読無、Vol.61、No.2、2011、pp.77-99

加藤 哲弘、方法としての受容美学、美術

フォーラム、査読有、Vol.23、2011、pp.25-30  
加藤 哲弘、視覚芸術における連続的物語叙述——「異時同図」概念の再検討——、査読有、Vol.10、2011、pp.1-38

〔学会発表〕(計10件)

田中 純、デヴィッド・ボウイのノにおける死——Rock Death から Nachleben へ、表象文化論学会(招待講演)、2016年7月9日、立命館大学衣笠キャンパス(京都府京都市)

TANAKA, Jun, Dystopian Visions in Gilbert Clavel's An Institute for Suicide, ヨーロッパ・アヴァンギャルド・モダニズム学会第4回国際大会、2014年8月31日、ヘルシンキ大学

田中 純、ダイアグラムと発見の論理——アーカイヴに眠る「思考のイメージ」、第4回アーカイヴ研究会(招待講演)、2014年10月31日、京都市立芸術大学芸術資源研究センター(京都府京都市)

ITO, Hiroaki, Missions and Images: On an Evangelical Illustrated Book Published in Rome in 1573, 10<sup>th</sup> International Conference of the Society for Emblem Studies, 2014年8月1日、University of Kiel (Germany)

KATO, Tetsuhiro, Raising the Flag on Iwo Jima: Pathosformel of Winner and Loser, 19<sup>th</sup> International Congress of Aesthetics, 2013年7月23日、Jagiellonian University in Krakow, Poland

TANAKA, Jun, The Chthonic Architecture of Gilbert Clavel: A Study on the Relationship among Architectural, Geographical, and Bodily Imagination, 19<sup>th</sup> International Congress of Aesthetics, 2013年7月24日、Jagiellonian University in Krakow, Poland

TANAKA, Jun, Futuristic archaism or archaic futurism: Gilbert Clavel's vision of time in Das Teleskop, Time & Temporality in European Modernism & The Avantgardes (1900-1950), 2013年9月18日、University of Leuven, Belgium

伊藤 博明、インプレーサからエンブレムへ——フランシス・ベイコン『大革新』のフロンティスピースをめぐって、シェイクスピア学会、2013年10月6日、鹿児島大学(鹿児島県鹿児島市)

ITO, Hiroaki, Missionaries and Images: On an Evangelical Illustrated Books Published at Rome in 1573, ルネサンス研究会、2013年5月15日、学習院女子大学(東京都新宿区)

加藤 哲弘、ルーモールのイタリア旅行(1805-06年)——食文化哲学と美術史研究のあいだで——、美学会西部会第289回発表会、2012年7月28日、同志社大学(京都府京都市)

〔図書〕(計13件)

田中 純、羽鳥書店、過去に触れる：歴史経験・写真・サスペンス、2016年、620

伊藤 博明、ヨーロッパにおける寓意と表  
象、2016年、701

伊藤 博明 他、日本大学芸術学部、エン  
ブレムの諸相、2015、233

伊藤 博明 他、埼玉大学教養学部・文化  
科学研究科、Musica mundana 気の宇宙論、身  
体論、2015、141

田中 純 他、新宿書房、時軸(ときじく)、  
2014年、141

田中 純 他、青弓社、陶酔とテクノロジー  
—の美学—ドイツ文化の諸相 1900-1993、  
2014、288

伊藤 博明 他、栄光社、イメージの劇場  
—近代初期英国のテキストと視覚文化、  
2014年、244

伊藤 博明 他、ありな書房、エンブレム  
の宇宙、2013、566

田中 純 他、マグナ・グラエキア—ギ  
リシヤ的南部イタリア遍歴、2013、370

田中 純 他、みすず書房、死後を生きる  
者たち— オーストリア 前後のウィーン  
展望、2013、360

田中 純、みすず書房、冥府の建築家—  
ジルベール・クラヴェル伝、2012、532

伊藤 博明、加藤哲弘、田中 純 他、あ  
りな書房、ムネモシユネ・アトラス、2012、  
756

田中 純、平凡社、建築のエロティシズム  
—世紀転換期ウィーンにおける装飾の運  
命、2011、201

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

伊藤 博明 (ITO, Hiroaki)

埼玉大学・大学院人文社会学研究科・教授  
研究者番号：70184679

### (2)研究分担者

加藤 哲弘 (KATO, Tetsuhiro)

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号：60152724

田中 純 (TANAKA, Jun)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：10251331

### (3)連携研究者

木村 三郎 (KIMURA, Saburo)

日本大学・芸術学部・教授

研究者番号：00130477

上村 清雄 (UEMURA, Kiyoo)

千葉大学・文学部・教授

研究者番号：60344959

足達 薫 (ADACHI, Kaoru)

弘前大学・人文学部・准教授

研究者番号：60312518